

緩やかさと静けさのなかで、見えないもの、 聞こえないものを感じ取る クロード・レジ演出× SPAC 『室内』

片山幹生

「大きな冒険の悲劇よりもはるかにリアルで、はるかに深遠で、私たちの現実の有り様にはるかにふさわしい日常の悲劇というものがある。この日常の悲劇を感じ取ることは難しくないが、それを示すことは難しい。なぜならこの本質的な悲劇は、単なる物質的あるいは心理的な性質を持っていないからだ」メーテルランク「日常の悲劇」

1896年に出版された哲学的エッセイ集『貧者の宝』に所収されている「日常の悲劇」の冒頭は、その2年前、1894年に書かれた一幕劇『室内』を想起させずにはいられない。瞑想的で静謐なこの作品は、日本平の山中にひっそりとたたずむ楢円堂という聖性を感じさせる空間で上演されるのがいかにもふさわしい。観客は緊張感に満ちた静けさのなかで意識を研ぎ澄まし、宗教的儀式を思わせる崇高で神秘的な時空のなかに没入していった。

東静岡駅を17時20分発のシャトルバスに乗って日本平の山のなかにある舞台芸術公園へ。この時間にはもう辺りは暗くなっていた。バスの乗降場である舞台芸術公園のロータリーから楢円堂に向かう道のりからすでに作品が始まっているような気がした。開演予定時間の5分前まで屋内ホール「楢円堂」の上層階の畳敷き回廊で待機する。開場前に整理番号順に行列を作る。この開場前の段階で観客には沈黙が要望される。劇場スタッフから並んでいる観客に咳止めののど飴を配布された。公演会場である楢円堂下層階への階段は既に暗い。なかに入るとアーモンド型をした楢円堂の壁に沿って、客席はゆるやかな弧状に二列設置されていた。前列の客席の足元は演技のエリアと接

している。この手前の空間には白い砂が敷き詰められていることが公演後にわかる。客入れがすべて終わり会場の雰囲気落ち着くと、客席前の演技エリアを照らす照明がほんの数秒間ぱおっと明るくなり、それから一切が暗闇に包まれる。

しばらくすると暗闇のなかにほんやりと灰色の塊が浮かび上がってくる。母親が幼い子供の手を引いて下手側から時間をかけてゆっくりと入場してくる。舞台中央付近までやって来ると、子供はそこで静かに身体を横たえる。そしてその後、彼はずっとそこにとどまったまま動くことはない。白い服を着た母子の現れ方はメゾチント銅版画の黒い背景に浮かび上がる人物のようだ。この母子以外の人物もあたかも実体のない幻影のように立ち現れ、自分の場所へごちなく、ゆっくりと移動していく。

観客から見て奥側が「室内」のエリアであり、男の子、父、母、二人の姉妹の五人の家族がいる。彼らの声は聞こえない。眠ったままの男の子を中心に、他の四人の家族は持続的にゆっくりとした速度で移動している。手前側は老人、見知らぬ人、老人の孫娘のマリーとマルトのエリアになる。室内である奥側と戸外である手前側を区切るのは明度の異なる照明でしかない。奥側の室内の領域は、手前側より相対的に明るく照らし出されている。しかしその明るさもほんやりとしたもので、室内にいる家族たちの顔はその淡い光の中では判別できず、人物のやわらかい輪郭を伝えるだけである。あいまいで精妙なグラデーションによって空間を照らす光は、抽象的で神秘的な劇空間を作り出す。その空間は、天国にも地獄にも行けずに彷徨する

死者たちの霊魂が苦しみを受けながら浄化され最後の審判を待つとされる煉獄を連想させる。

手前の領域にいる人々は「室内」の観察者であり、奥に見える室内の状況を言葉にする。言葉は音楽を伴わない朗唱のように、とつとつと無機的に淡々と、音節を区切って、慎重にひとつひとつ音を拾い上げるように発声される。フランスの批評家ダヴィド・レスコの指摘によると、レジの演出はメイエルホリドがメーテルランク作品上演にあたって記した覚書の指示を踏襲しているとのことだ。メイエルホリドは台詞の発声について次のように指示している。

「言葉は冷徹に彫琢されなくてはならない。声を震わせたり、感情に訴えるような表情をつけたりしてはならない。音は常に支えを必要としている。言葉は深い井戸に落ちる水滴のように落ちていかなければならない。観客はまっすぐと落ちる水滴の音を耳にする」

『室内』の登場人物たちとその観客が共有する死への接近と無力さの悲劇の経験は、メイエルホリドの覚書にあるように、感情を込めない無機的な発声でこそ説得力を持って伝えることができるだろう。俳優たちが発する声には芯がなく、空間にたよりなく浮遊しているかのように感じられた。しかしこの公演でレジ×SPACが選択した日本語の特殊な発声法が、果たしてメーテルランクのテキストにふさわしい硬質で、かつ詩的な響きとなり得ているかどうかについては、議論が分かれるだろう。メーテルランクの台詞は平易なフランス語で書かれ、終わりきらない短い語り、ことばとことばの間の沈黙、繰り返しの多さが特徴となっている。レジ×SPACの『室内』では、既に十分に寡黙と言っている原作の台詞がさらに切り詰められ、日本語に置き換えられた台詞は原作のエッセンスだけを抽出したかのような詩的断片にまで刈り込まれている。

俳優の動きも発声と同じく、あたかもひとつひとつ手探りして確認しながらのように、慎重にゆっくりと行われていた。奥の家族の様子はもっぱら手前にいる老人と見知らぬ人、そして遅れてやって来る老人の孫娘、マリーとマルトの言葉によっ

て伝えられるのだが、その動作は必ずしも台詞で伝えられる内容と一致していない。その動きは確かにことばに反応しているように感じられるが、その反応のしかたは不可思議で自由に謎めいている。登場人物の関係性は象徴的な動きによって表現されている。舞台の中央に横たわり眠ったままの少年は、その不動性ゆえに圧倒的な存在感を放ち続けている。

老人の孫娘のマリーとマルトが左右から入場し、室内にいる四人の家族（父、母、二人の娘）とその様子を外から眺める四人の観察者（老人、見知らぬ人、老人の孫娘二人）が配置されると、眠っている少年を中心に登場人物全員がゆっくりとした舞踏的な動きで、大きな幾何学模様を描いているように思えた。子供は手前側の世界と向こう側の世界の境界にいて、この世界の秩序の軸となっている。俳優たちの動きの連携とリズムは、多数の歯車で構成されている巨大な機械時計の機構を連想させた。

『室内』は2010年にベルギーの出版社から刊行されたメーテルランク全集で20ページほどの長さしかない（*Euvres. Maurice Maeterlinck, éd. Paul Gorceix, Bruxelles, Versailles, 2010, t.II, p. 523-543*）。普通に読めば30分ほどで読み終わってしまうごく短い戯曲だ。老人と見知らぬ人は、とある家族にその家族の長女の死を伝えなくてはならない。しかし窓明かり越しの家族の団欒を外から目にする二人は、この痛ましい事実を伝えることを躊躇し、なかなかその家の扉を叩くことができない。ただこれだけの出来事を伝える戯曲をレジは、原作の言葉をさらに刈り取った上で90分の長さに引き延ばして上演する。緩慢さはこの作品の重要な鍵であることはあえて語るまでもない。極端に引き延ばされた時間のなかで初めて読み取ることができるもの、感じるすることができるものがある。緩慢の時間のなかで、じわじわとゆったりと変化していく光と動きのなかに、観客の精神は沈潜し、極めて日常的で平凡な悲劇である死とじっくりと向き合い、その凡庸な悲劇がもたらさうる衝撃を想像することが可能になる。人が死ぬということはどういうことだろうか。日常の速度のなかで私たちは、人が死んでしまうことの意味を考える余

裕を失っているのではないか。

散々躊躇した挙げ句、老人は家族の家の扉を叩き、長女の死を家族に告知する。告知はこの作品のクライマックスで、舞台上で提示されるただひとつの劇的な事件である。この一瞬にむけてそれまでの時間が費やされてきたのだ。それまで緩やかな変化を続けながらずっと持続していた曖昧な時空が、告知の瞬間に鋭利な刃物でサッと鮮やかに切り裂かれる。平穏で幸せな時間を打ち砕く無慈悲で残酷な現実の衝撃は、家族が一瞬で舞台から走り去っていくことで鮮やかに表現される。そしてそれに続く場面の厳粛さ。再び舞台の照明は暗くなり、手前にいたマルト、マリー、村人たちはシルエットになって、左手に向かってゆっくりと退場していく。最後に手前側に残ったのは、この家族とも村人たちとも関わりのない、たまたまこの悲劇に立ち会った「見知らぬ人」である。呆然と舞台上に取り残された「見知らぬ人」は、「子供は目を覚まさないかった」という虚ろな言葉を残して、舞台からやはり立ち去っていく。

舞台中央で横たわった子供だけがひとり舞台に残される世界は再びゆっくり暗闇へと戻っていく。すべてがはかない幻影のように消え去っていく。

川で死んでしまった長女の死をその家族に伝えるに行く。物語の筋立ては実にシンプルであり、展開することなくずっと停滞したまま、ドラマは最後の告知の瞬間にのみ凝縮されている。にもかかわらずこの小さな作品は数多くの謎を含有している。なぜあの少年は眠り続けるのだろうか。眠り続ける少年は「死」の象徴なのだろうか、それとも彼の存在は「生」への希望を示しているのだろうか。「見知らぬ人」は一体何者なのだろうか。女はなぜ川に身を投げて死んでしまったのだろうか。なぜ老人の娘のマルトとマリーだけが作品のなかで固有名を与えられているのだろうか。登場人物のあの奇妙な動きはいったい何を意味していたのだろうか。

観客は荘厳な緩やかさのなかで変化する光と動きの中に浸ることで、日常ではまったく味わうことのできない世界の一部となる。不可解な表現の

ディテールにひとつひとつが観客の想像力を穏やかに刺激し、静謐で神秘的な異世界への旅へと導いていった。

(10月11日(日)18時開演、静岡舞台芸術公園 屋内ホール「楯円堂」での公演)

【公演情報】

『室内』 Intérieur

日本語上演 / 上演時間：100分 [途中休憩なし]

〈神奈川公演〉10月2日(金)19:30、

3日(土)、4日(日)各日14:00

KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ

〈静岡公演〉10月10日(土)、

11日(日)各日18:00

静岡県舞台芸術公園 屋内ホール「楯円堂」

演出：クロード・レジ

作：モーリス・メーテルリンク

訳：横山義志

出演：泉陽二、大庭裕介、貴島豪、下総源太郎、鈴木陽代、たさいみき、永井彩子、布施安寿香、松田弘子、弓井茉那、吉植莊一郎、関根響、西川尊(アンダースタディ)

演出助手：アレクサンドル・バリー

装置デザイン：サラディン・カティール

照明デザイン：レミ・ゴドフロワ

衣裳：サラディン・カティール、大岡舞

通訳：浅井宏美

技術監督：サラディン・カティール

照明操作：ピエール・ガイヤルド

舞台監督：内野彰子

衣裳ワードローブ：清千草

制作：ベルトラン・クリル、米山淳一

製作：SPAC- 静岡県舞台芸術センター、アトリエ・コンタンポラン

主催：SPAC- 静岡県舞台芸術センター

提携・技術協力：KAAT 神奈川芸術劇場 [神奈川公演]

協賛：ANA

後援：在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本

舞台写真：三浦興一
宣伝美術：坂本陽一 (mots)

障がい者割引：2,800円 [障害者手帳をお持ちの方]

◎チケット料金

〈神奈川公演〉

一般：4,100円
シルバー：3,400円 (65歳以上の方)
U24：2,000円 (24歳以下の方)
障がい者割引：2,800円

〈静岡公演〉

SPACの会：3,400円、
ペア割引：3,200円 (2名様で1枚につき)
一般：4,100円、
ペア割引：3,600円 (2名様で1枚につき)
グループ割引：3,200円 (3名様以上で1枚につき)
ゆうゆう割引：3,400円 (満60歳以上の方)
学生割引：[大学生・専門学校生] 2,000円
[高校生以下] 1,000円

◆『室内』上演歴◆

2013年

6月 舞台芸術公園 榑円堂 (ふじのくににせかい演劇祭 2013) [静岡] 初演

2014年

5月 ウィーン芸術週間 [オーストリア]
5月 クンステン・フェスティバル・デザール [ベルギー]
7月 アヴィニョン演劇祭 [フランス]
9月 フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ [フランス]

2015年

9月 アジア芸術劇場 オープニング・フェスティバル [韓国・光州]
10月 KAAT 神奈川芸術劇場 [神奈川]
10月 静岡県舞台芸術公園 榑円堂 [静岡]